

中国国際交流協会代表团が来日、各地で交流

『重ねられた心と心の交流』

靖国参拝問題等で日中の関係が再びぎくしゃくする中、中国国際交流協会代表团3名の方々を2003年の第1回の代表团に続き、10月25日から11月1日までお迎えし、各地でまさに心と心の交流を重ねることが出来ましたので、その様子を報告します。

関西からのスタート

一行は、10月25日に大阪国際空港に到着しました。メンバーは、朱俊発中国国際交流協会理事(中国アフリカ問題研究会常務理事)を団長に、羅毅中国国際交流協会理事(元外交官として南アフリカ大使館に勤務)、そして、通訳として中国国際交流協会アジア・アフリカ・オセアニア局のアシスタント・リサーチの王琳さんという3名でした。朱俊発さんと羅毅さんは初めて来日されました。当日の晩は、大阪の老舗の料亭である花外楼で歓迎夕食会が開かれました。ICのそもそもの母体となった、オックスフォード・グループ時代にこの運動に出会われたという徳光憲花外楼会長と、スイス・コーの世界大会に参加されたこともある徳光孝信社長にお迎え頂き、日本情緒溢れる静かで落ち着いた雰囲気の中、素晴らしい日本料理でおもてなし頂いたのは、初めての訪日の幕開けに相応しいものでした。

翌、26日はICの会員で、NGOのネパール教育協力会の代表、また、京都NGO協議会会長も務めておられる、京都生まれ・京都市育ちの石田進さんのご案内で、銀閣寺や清水寺はもとより、余り観光客の訪れない静かで



●右から朱団長、王さん、羅さん(花外楼にて)

雰囲気の良い寺院等にご案内頂きました。また、今後の国作りの方向性を模索していた中国の指導者に、日本の経験に基づいて、いくつかの提案をしたためて手紙を送られたという体験等も石田さんからお話し頂く等、話しは京都や日本の伝統文化にとどまりませんでした。

夕食時には、鬼丸昌也テラルネッサンス代表にも加わって頂きました。大学生の時に、自らNGOを立ち上げ、カンボジアでの地雷撤去のための活動や、最近ではウガンダでの元・子ども兵の社会復帰のサポートにま

■主な内容■

◆中国国際交流協会訪日レポート・1-3

◆ICと私・11-12

◆第2回東北アジア青年フォーラムレポート・4-8

◆会員の活動紹介・13-14

◆第59回コー世界大会レポート・9-10

◆CRT日本委員会ニュース・15

で活動を広げているという25才の青年である鬼丸さんの情熱溢れる話に、アフリカの国々は殆ど訪れたという朱さんたちも熱心に聞き入っていました。

心と心の交流

翌日は、大阪城を見学した後、横浜経由で上京し、東京でのプログラムに入りました。

国会議員等との懇談を経て、29日の午前には、堀内伸介元ケニア大使と意見交換を行いました。ナイロビのスラムで、エイズのHIV陽性者に、ただ薬を与えるのではなく、技術を教え、職業と希望を与える援助を行うことで大きな成果を得ているという活動にも携われているという、堀内元大使のアフリカへの洞察と愛情の深さを感じさせられるお話しは大変示唆に富んだもので、中国の方々ももっと長くお話しをしたかったと言われていました。

同日の午後にはIC会員との交流ミーティングが行われました。参加者一人ひとりが、ICとの出会いを含め、それぞれ率直な形で自己紹介をした後、中国の朱さんと羅さんからお話しを伺いました。朱さんが、「皆さんのお話を聞いて感動しました。友人同士の心と心の交流だと感じました。実は、私の父親は、1942年に日本軍に捕らえられ迫害されて亡くなり、貧しい生活の中、5人兄弟を母が苦勞して育ててくれました。

来日の前、日本はどうして発展したのかを知りたかったのですが、日本に来て、日本の国民が良く勉強しており、自立していることが分かりました。また、日本が環境が良く、交通が発達し、社会が安定して秩序があり、清潔で国民の生活も豊かなのを感じました。今回、皆さんに誠意を持って対応してもらって嬉しく思います。日本国民も平和を望んでいることが良く分かりました。隣国同士仲良くできれば世界に寄与できると思います」と話されたのには一寸驚きました。それまでの温厚で優しい物腰からは、過去そのようなことがあったとは、感じさせられなかったからです。

羅さんは、「日本を直接自分の目で見て、両国の格差は大きいと感じました。上海や北京に林立するビルを見て、日本ともう変わらないと言うような中国人もいますが、外見ではなく、中身の点で大きな違いがあります。例えば、今、泊まっているホテルも部屋は狭くても、泊まる人に便利のように様々な工夫がなされています。中国が日本と同じレベルになるのにはこれから50～100年掛かるかもしれません」と話されました。同夜には、日中友好さいたま市民会議の代表でもある、榊たか子国際IC日本協会副会長の主催で同会議のメンバーに

よる歓迎会が開かれ、遅くまで和やかで楽しい交歓が続きました。

小田原での交流

翌30日には、小田原に向かいました。小田原駅では、アジアセンター小田原の中山啓介所長とボランティア通訳ガイドの王彦文さんに迎えて頂き、箱根に向かいました。生憎の曇り空で残念ながら富士山は望めませんでした。訪れた箱根神社では、中山さんから神道の考え方を説明頂く等、箱根の自然と共に日本の伝統文化の一端にも触れて頂きました。同夜には、IC/MRAサークル主催の懇談及び夕食交流会を開いて頂きました。二宮秀夫IC/MRAサークル代表は、挨拶の中で、「自分は戦争の馬鹿らしさを感じ、不戦の誓いをした者です。戦争を無くすための思想的な基礎として、融合を唱えたIC(MRA)と一円融合、心田開発を唱えた報徳が重要と思い実践に励んできました。日本も戦争に負け、飢餓を経験しました。飢餓は世界の戦争の原因の一つであり協力して解決していきたいと思います。全ては一人ひとりの心から始めるものと、この十年このサークルを毎月開催して来ました」と述べられました。

続いて、朱さんは、「中国国際交流協会は、中国人民と各国の人々との理解を深め、平和と共同の発展を促す目的で作られました。2000年に、日本のICと交流を始め、成果をあげています。美しい場所に位置するアジアセンターに迎えて頂き感謝します。中国国際交流協会が来日する時は必ず寄らせて頂きたいと思います。今回多くの古い友人と会い、多くの新しい友人ができましたが、人と人の交流が重要です。この訪日を通して日本の方々から沢山のことを学べました」と話されました。

出席者の箱根小学校の鈴木恒美先生は、「一昨年、中国国際交流協会の方々に学校に来て頂きとても感動的な交流ができました」と話され、生徒さんたちが折った折り紙を贈られました。



●報徳博物館で二宮尊徳の事蹟について説明を受ける

羅さんは、「MRA (ICの前身) の理念は、人類の平和、世界レベルでの戦争を防ぐ重要な意味を持ちます。MRAは第2次大戦の後、世界各国の相互理解に重要な役割を果たしました。現在、日中両国の政治の面での問題が深刻なため、ICの役割がより重要になっています。日本に来て日本の人々の中国の人々への友情が深いと感じました。昨年北京に来られた中山さんに今日小田原で再会でき、非常に親しみを感じました」と述べられました。

最後に、中山啓介アジアセンター所長は、「中国のお二人が日本に来られて多くのことを学ばれたと聞いて、生徒が先生にほめられたような、嬉しいと同時に身が引き締まる感じがします。日本の文明の基礎は中国からで、それをベースに2000年の歴史を経て来ました。日本が戦争をしかけて迷惑をお掛けしたという厳然たる歴史があります。敗戦後、戦争は二度としないと誓って、経済発展に努めました。歴史から学びながら、力を併せて世界の平和と貧困問題の解決のために働きたいと思えます」と述べられました。

翌朝は、草山宮司のお招きで報徳二宮神社で交流会を開いて頂き、二宮尊徳思想のエッセンスを紹介して頂きました。また、神社の本殿をご案内頂き、神道の考え方についてもご説明頂いた後、報徳博物館を訪ね、二宮尊徳の事蹟についての説明もして頂きました。現在、国際二宮尊徳思想学会が発足しており、今年も昨年に引き続き尊徳思想の研究のために一年間の予定で滞在中の、北京大学の大学院生お二人も共に参加してくれましたが、ここにも日中の新しい形での交流が育っていると感じさせられました。

更なる交流を

東京に戻って、午後には橋本徹国際IC日本協会会長との懇談に臨みましたが、羽田孜元首相にも加わって頂きました。靖国参拝問題等に関する率直な意見交換の後、朱団長から、「来年の適当な時期に、今度は日本からICのグループをお迎えしたい」とご招待を頂きました。



●率直な意見交換を図った中国代表と羽田元首相(左端)と橋本会長(中央)

同夜には、ICメンバーとの送別夕食会が開かれ、羽田孜元首相ご夫妻、谷川和徳元法相ご夫妻を初め15名程が参加して最後の交流を図りました。

今回の交流を通してずっと通訳を務めてくれた、王さんから、何故日本語を学ぶようになったのかというお話を頂いた後、羅さんは、「今までアフリカ関係の仕事で日本人と触れる機会はありませんでした。年輩の人たちから戦争のことを聞いていたので頭の中は過去のことばかりでしたが、昨年国際IC日本協会のグループを中国に迎え、短い時間でしたが、その交流を通じて色々と感じたことがありました。今日の午後、羽田先生から、『これからの人生を世界の平和のために捧げる』という話をお聞きし感激しました。また、昨年韓国でのIC日中韓青年フォーラムで榊たか子先生がご高齢にも拘わらず、青年たちの相互理解と友情を育むために活動されているのを見て感動しました。物質文明、民衆の生活の向上と、精神文明(道徳・思想)を共に発展させるべきだと感じました。調和した社会が大切で、経済が発展しても、紛争や戦争があれば良い国にはなりません。午前中、報徳博物館を訪ね、日本人は伝統文化を大事にして、良く研究していると感じました。中山夫人からは愛読書という老子の英文の本を頂きました。中国は一時期古典を軽視していましたが、今日では、王さんの娘さんが論語を学ぶようになっています。中国が発展するためには外国の優れた点を学ぶべきです。今回、国際IC日本協会のご招待で、日本の発展振りを自分の目で見られて感謝しています。これからもこの日中の二つの協会が引き続き交流できることを望んでいます」と話されました。

翌11月1日に一行は帰国の途に就かれましたが、空港で来年の再会を誓いながら、別れを惜しまれました。

(社) 国際IC日本協会事務局

長野清志



●別れの惜しまれた送別会

第2回東北アジア青年フォーラム

「未来志向的な東北アジアの協力方法の模索」

去る8月26日から31日まで韓国MRA/ICの主催で日中韓の青年が集まり、「未来志向的な東北アジアの協力方法の模索」というテーマの下、第2回東北アジア青少年フォーラムが、ソウル市及び天安市(国立中央青少年修練院)にて開催されました。

中国からは中国国際交流協会の曹小冰理事、中華全国青年連合会の王松山副秘書長、同じく国際部の孟洋氏のもと、内蒙古医学院、北京科技大学、重慶大学、河南理工大学、内蒙古師範大学、四川大学、安徽医科大学、浙江理工大学、武漢大学、四川師範大学、山東建築工程学院、北京第二外国語学院、北京師範大学、曲阜師範大学、浙江传媒学院、河南大学からの学生の代表17名、韓国からは韓国技術教育大学、成均館大学、亜州大学、中国外交大学、誠信女子大学、湖西大学、淑明女子大学、梨花女子大学、蔚山大学、漢陽大学、延世大学、建国大学、慶熙大学、水原大学、徳成女子大学からの代表30名、日本からは、橋本徹国際IC日本協会会長、事務局、通訳の金光明氏(ブラボジャパン代表取締役)のもと早稲田大学、中央大学、明治学院大学、電気通信大学、国際基督教大学、日本女子大学、法政大学からの代表14名が参加しました。

統一テーマの下、経済・文化・環境の3つのグループに別れ、それぞれの担当における3国の協力のあり方について率直に意見を交換し、ひとつの答えを出すことができました。また、リクリエーションを通して肌と肌がふれあい、各国の文化紹介を通してお互いの文化に対する理解を深めることができました。ホームステイでは韓国の普段の生活に触れることができ、また一夜を共に過ごすことにより韓国に無二の友人を作ることができました。数々のプログラムを通じて、相互理解と友好の促進が図られました。

今回のフォーラムから普段の学生生活では味わい得ない経験を参加者は得ることができました。この経験を一人ひとりが帰国後活かしていています。会議の参加者の感想をご紹介します。

(内田 裕昭、早稲田大学社会科学部3年生)

一生の親友ができたフォーラム

金 幸美 (明治学院大学国際学部1年生)

今回のフォーラムに参加して特に強く感じたことは、五泊六日の短い期間の中でこれほど充実した時を過ごせたのは初めてだということです。あまりにも夢のような素晴らしい体験をしたので、韓国から日本に帰って来てもその時の興奮がおさまらず毎日今回のフォーラムのことばかり考えていました。今回のフォーラムでは、今まで出来なかった体験をし、多くの人と出会うことができました。

中でも一番印象に残っているのは、韓中日で文化公演を行ったことです。なぜなら、互いの文化を紹介したことで相手がどのような文化を持っているかを知ることが出来たからです。本やテレビなどで見て感じていたよりも、やはり実際自分の目で見て相手の文化と触れ合うことはとても大事なことだと思いました。今回日本は、マツケンサンバを紹介しましたが、私は紹介をする前、韓

国、中国の人の反応が気になりました。しかし、そんな心配もいらず、みんな一緒に楽しく歌い踊ってくれとても嬉しかったです。最後に、韓国側が前でピアノやギターを演奏しながらアリランを歌った時に、韓中日の三ヶ国の青年は肩を組みながら全員で歌を歌いました。



●勢ぞろいした日中韓の参加者

近くて遠い存在であった国が、今では寄り添いながら歌を歌い輪になっている光景はとても美しいと感じました。今回の文化公演や文化の分科会での話し合いを通じて改めて感じたことは、お互いのことを知るにはやはり交流を深めることが重要だということでした。ニュースでは、やはり片寄った情報しか知ることが出来ず、相手のことを誤解しお互いの間に隔たりが生じてしまいます。しかし、今回のように交流し、寝食を共にすることで、相手のことが少しずつわかるようになり、また文化の違いを改めて感じる事が出来ると思えました。このように、すばらしい交流の機会を与えて頂きとても感謝しています。今までは、在日朝鮮人の友達しかいませんでしたが、今年日本の大学に入学して初めて日本人の友

達をつくる事が出来ました。また、このフォーラムのおかげで韓国の友達、中国の友達をつくる事が出来てとても嬉しいです。閉会式の時に、「その時限りの友達ではなく一生付き合う親友(Friends for life)をつくってください」と祝辞で橋本徹氏がおっしゃったように、とても良い親友ができたと思います。

今回のいろいろな体験を通して刺激をもらい一回り大きくなって帰ってこられたと感じます。このことを、これからの大学生活や将来に活かしていこうと思っています。今回のような交流の場を与えてくれたMRA/ICに感謝すると共に、これからも多くのことを学び、東北アジアの未来につながるように活動し伝えていけたら良いと考えています。

厚い壁を乗り越えて

石井 千普 (日本女子大学家政学部児童学科2年)

韓国の地に足が着いたその瞬間から、このフォーラムはスタートしました。韓国学生のみなさんが、私たち日本人チームを温かく迎えてくれ、私の胸の鼓動はますます高まり始めました。私は、このフォーラムには今回初めて参加させていただくので、大きな期待と少しの不安を胸に韓国に降り立ったのです。期待とは、新しい仲間との出会い、3カ国それぞれが持つ考えや意見を肌で感じる機会など、この6日間で繰り広げられるドラマ全てに抱くものです。少しの不安とは、コミュニケーションのこどに対するものです。言葉の壁を乗り越えて、これから出会う仲間とうまく関われるだろうかというものでした。

少し緊張しながら開会式に臨み、その後は、さっそく各分科グループに別れて討論の時間が持たれました。開会式からの緊張を少し引きずっていた私ですが、それもその時には忘れていたように思います。討議の席での韓国・中国・日本それぞれの環境班メンバーの熱い姿勢に、私はすっかり夢中になっていたのです。

ここで気付いたことがあります。それは気付いたというのでしょうか、いや、よく分かっていたつもりではいたのですが、頭の中での理解だけにすぎなかったというのが実際のところだと思います。それは、各国それぞれこのフォーラムのためにまとめた考えが異なるということです。言葉で表すとこのようにシンプルなことなのですが、これは私たちにとってとても重要な課題を示しています。それぞれの考え・意見が異なるというのは、ある問題つまり対象の“認識”というはじめのステップから私たちの思考の過程が違っているということなのです。

3日間の討論を進めていくうえで、この“認識の違い”が私たちにとって容易に打ち壊せない厚い厚い壁でした。それによって私たちは幾度もぶつかり合いました。きっと私たちは、自分たちが持ってきた考えを主張することばかりに必死になっていたのでしょう。他国側へ対する理解の前に、自国側の主張ばかりに。もちろん私自身もまず一番に、日本側のまとめた考えを伝えることで頭がいっぱいでした。

けれども、私たちの討論が平行線をたどり、ついには行き詰まってしまった時、私たちみんなは大事なことに気付いたのです。他国側の意見を理解することです。まず、他国側の問題の捉え方、それによって考え出された意見に耳を傾けること。それが、3ヶ国共に議論を重ね理解し合い、ひとつになる第一歩なのでした。行き詰まって初めて、この大切なことに私たちは気付き始めたのです。それからの討論では、それぞれの国が共に、ますます熱く、激しい意見交換が繰り広げられていきました。



●中国からの参加者と共に(中央が石井さん)

そして私たちは、環境班グループとしてひとつになれました。

身をもって体験、そして実感に結びつく数多くの経験をしたこの6日間。私にとっては、まるで夢であったかのような素敵な6日間でした。仲間と言葉の壁を乗り越えられた瞬間、熱く討議し合った瞬間、みんなの力がひとつになった瞬間、いずれの感動も、日本に帰って来た今

も鮮明に思い出されます。6日間という短い時間は、あつと言う間に過ぎ去ってしまったけれど、私の心の中にはしっかりとその“時”の記憶が刻まれています。「生涯の友 (Friends for life)」という言葉を通じて、私は、このフォーラムで出会った全てのみなさんと固く結ばれた絆を、いつまでも大切にしていきたいと思います。

最高・貴重・充実の6日間

日高 史暁 (電気通信大学電気通信学部2年)

私にとってこのフォーラムはとても貴重なものとなった。充実した6日間であった。

このフォーラムに参加したきっかけは、兄に紹介されたからである。当初、私は韓国や中国といった国に興味をほとんど持っていなかったの、参加することを躊躇っていた。異国の文化に触れることに一切興味を持っていなかった私は、大学内でも語学の学習を疎かにし、ただ単位のためだけに勉強をしていた。ICの理事の方や、前回のフォーラムの参加者から説得され、このフォーラムに参加することにしたのだ。

フォーラムの参加を躊躇っていた私の思いは、フォーラムの参加によってすべてが吹き消された。そしてわが国から近い国について、知らないことが山ほどあることに危機感も感じた。

このフォーラムのテーマは、「未来志向的な東北アジアの協力の方法を求めて」であり、特に東北アジアの経済・環境・文化の3つの分野について、いかにして青年が協力をしていくかを議論していくものであった。「未来志向的」という言葉がポイントである。日中韓の3カ国から、各々の分野において携わっている方を呼んでいただき、講演もしていただいた。とても貴重な時間だった。

私は分科会が環境になり、日中韓における環境の問題は何かを調べ、フォーラムの前にレポートを書いた。レポートを書いている時は、とにかくテーマが大きいものだったので、何を書けばいいのかわからず、とても苦労した。国内の環境問題から東北アジアの環境問題へと、書くことのスケールが大きくなっていくうちに「僕たちはなんて大きい問題に挑もうとしているのだろう」と、自分がフォーラムでやろうとしていることに不安を抱いていた。ディスカッションを振り返ってみると、それぞれの国が意見をぶつけるだけでとても大変だった。事前準備や事前知識が足りなかったり、議論がかみ合わなかったり、限られた時間で深い議論をすることは難しく、多少の課題は残ってしまった。日本のメンバーに関しては、まともな議論に参加できたのが一人だけだった

ので、言葉の問題もとても大きいものとして残った。だが、東北アジアの環境問題とは何か、何をしていけばいいかを認識できただけでも収穫があったと思う。プレゼンテーションもよくできたと思う。夜から朝の4時まで議論できたことも、交流を深めた良い材料であった。

また交流を深めるために、韓国MRA/ICの方たちがたくさんレクリエーションを用意してくれた。その一つ一つがとても記憶に残るものであった。各々の国の文化公演も印象的であった。中国の民族衣装や伝統的な舞踊であったり、韓国のテコンドーや民族楽器の演奏であったり、日本ではとても見る事ができない貴重なものを見せていただいた。特にレセプションで日中韓の学生が一つになって、肩を組み合ったり、全員でゲームを競い合ったり、日中韓の旗をそれぞれ仲良く掲げる姿は、とても印象に残った。この形こそ、東北アジアの未来志向的な姿の究極の理想形なのではないだろうか。

韓国の家庭へのホームステイも素晴らしかった。韓国の家庭のおもてなしはとても温かく、たくさんの食べ物や飲み物を提供していただき、韓国の文化をよく知ることができた。また、より韓国という国を好きになることができた。これも貴重な経験であった。とても感謝している。この時に、韓国語がもっと話せたら・・・という願望が強くなった。

別れの日、韓国MRA/ICのメンバーのほとんどが仁川空港まで来て、僕らを見送ってくれた。僕は流しそうな



●韓国と日本からの参加者と共に (左端が日高さん)

涙を必死にこらえていた。泣いているメンバーもいた。このフォーラムが充実していたことの証拠だと思う。他国との学生と交流を深めることができたことは、最高のたからものである。

帰国後、韓国の学生とメールの交換をし、今でも交流を深めようと、私は奮闘している。彼らとの関係はこれ

からも続くだろう。いや続けなければならないのだ。それこそが、未来志向的な東北アジアの協力の構築に必要なことであると思うからだ。次に彼らが日本に来たら、僕らが彼らを精一杯歓迎しなければならない。

このようなフォーラムに参加でき、最高に充実した6日間を過ごすことができ、本当に感謝している。

人生の宝となった体験

メイ・チン (北京科技大学三年生)

緊張と忙しさ、しかし、充実して楽しい、短い短い5日間。

フォーラムの討論の準備と参加で緊張し忙しかったですが、豊かで多彩な活動に身も心も楽しみました。

言葉の問題で困っても、一つの微笑みが、暖かい一言の挨拶が私の心配を和らげてくれました。似通った文化と東北アジア特有の血統を有した中日韓の若い友達が共に集い、誠実に向き合い、豊かな情熱をもって、考え、寝食を忘れて討論しました。積極的に動き、寛容の精神を養い、認識を深めました。共に努力し、共にことに当りました。信じる気持ちと力に満たされました。短い時間の間に、お互いに親しくなり、友情を育てました。

5日間の韓国滞在中、この国に対してたくさん感じました。清々しい空気と美しい緑の環境の中で人と自然の融和を感じました。韓国人の投げかけてくれた親しみのこもった微笑、この社会の中での人と人との融和を体感しました。

大切な韓国の民族の伝統文化に触れたことにより、韓国の人々への親しみを覚え、彼等の質実さと誠実さの理解に至り、また、訪れた家庭での思いやりにも感心しました。日本と韓国の友人達から多くのことを学びました。彼等の科学的な精神、勤勉さ、団結と融和は深い印象を与えてくれました。これら一切の体験は、私の人生の宝箱の重要な中身の一部になることでしょう。

私達3ヶ国の青年達にこの貴重な交流の機会を与えてくれた韓国MRA/ICに感謝します。

また、韓国滞在中に韓国の友人達が、熱心にそして細やかに配慮し助けてくれたこと、また、日本の友人達の好意にも感謝します。あなた達を決して忘れることはないでしょう。

最後に、東北アジア青年フォーラムが、中日韓の協力と交流に更に寄与できるよう、また、三国の青年たちが東北アジアと世界の平和と発展により寄与できるよう祈ります。

団結して発展出来るように互いに努力を

イ・ミンジェ (韓国・徳成女子大学3年生)

韓中日東北アジア青年フォーラムに参加することになった時、どんな行事より期待感が大きかった。距離的に本当に近い国である、中国と日本。しかし、日本とは歴史的な問題で、中国とは北朝鮮をはさみ、遠く感じる国であった。しかし、この三国は離れられない関係だということは誰もが良く知っていることだ。前述のように今まで色々な要素で緊密な関係を結べなかったことは事実だ。三国の青年たちは、それぞれ課題をもっているのだ。それだけにこのような三国の青年が集うフォーラムはとても重要な意味を持つと感じた。我々が今後どのようにしていかなければならないかという方向を示してく



●文化の夕べで披露された韓国の伝統音楽(サムルノリ)

れ、自分が今後どのようにすべきかを考え、また、三国の青年たちがお互いに討論して互いの考えを分かち合うからだ。

三国の青年たちがこのように討論しながら、お互いに意見を聞いて理解しようとする機会は多くはないと思う。それで、この行事に参加する私の心持ちも単純に他の国の青年たちに会うことを期待するものではなかったように思う。

私の参加した分野は文化であった。文化は、一番簡単に話ができそうでいて、難しい部分があったようだ。余りに処する状況が違い、文化も似たものと思いがちだが、それぞれ個性を持っているので、討論は、互いの文化状況を理解することから始めた。互いに通訳を介して話さなければならなかったので、直接話が出来なかった点が本当に残念だった。三国の言語が英語であったならば、もう少し討論して、互いの話を理解できたのではないかと悔いが残った。我々にとっての課題は、三国の青年たちのネットワークの形成、交流プログラムを増やす

こと等、三国の地理的な近さのみにとどまらず、人と人が会う交流からもう少しお互いを理解して深い関係を結ぶべきという意見が多く出た。もちろんこれには政府や団体の力が必要ではあるが、それ以前に、互いを受け入れる心を持つことの重要性を知らせるべきであるという意見であった。

ヨーロッパはヨーロッパで互いに団結して発展しようとしている。我々も見習わなければならない。特に我々三国は、地理的に近い有利な点があり、団結して発展出来るように互いに努力を傾けねばならない。このフォーラムを鏡として我々青年達は、将来、文化、経済、環境の各分野でアジアを考える人材にならなくてはならないと思う。このように考えるようになる機会を与えてくれた今回のフォーラムに参加できて本当に幸運であった。世の中をもう少し広く見ることのできる機会となり、このフォーラムを糧に、もっと学び、考え、実践していこうと思う。

【スケジュール】

8月26日(金)(第1日)

12:55 (成田発KE 702 便、仁川着 15:20)
 17:30-18:30 開会式(国際青少年センター)
 18:30-19:00 講演: 鄭根謨(チョン・クンモ)
 明知大学 総長
 テーマ『未来指向的な東北アジアの協力の方法を求めて』
 19:00-20:30 歓迎夕食会
 20:30-21:30 講演
 テーマ「東北アジアの経済協力のための青年の役割」
 講師: 橋本徹国際IC日本協会会長
 ドイツ証券東京支店会長

講師: 曹小冰中国国際交流協会理事

09:40-10:00 質疑応答
 10:30-11:00 環境のグループからの発表
 11:00-12:00 環境分科会グループ主導による討論
 13:00-14:40 サブテーマ3に関する講演
 テーマ「東北アジアの青年の文化ベルト構築のために協力しあう方法」
 講師: 朴哲雄韓国ユースサービスセンター企画部長
 14:40-15:00 質疑応答
 15:30-16:00 文化のグループ代表による発表
 16:00-17:00 文化分科会グループ主導による討論
 19:30-22:00 レクリエーション

8月27日(土)(第2日)

08:40 国立中央青少年修練院(天安)に向けて移動
 09:00-12:00 ワールドカップスタジアム等見学
 14:00-14:30 経済分科会グループ代表による発表
 14:30-15:30 経済分科会グループ主導による討論
 20:00-22:00 各国文化紹介

8月29日(月)(第4日)

08:30 ソウルに移動
 10:00-15:00 ソウル見学後、各ホームステイ先に

8月30日(火)(第5日)

16:00 国際青少年センターに戻る
 16:00-17:00 共同声明文発表準備
 17:00-20:00 閉会式及び送別夕食会

8月28日(日)(第3日)

09:00-09:40 サブテーマ2に関する講演
 テーマ「東北アジアの生命共同体を構築するための環境協力の方法」

8月31日(水)(第6日)

11:20 仁川空港より帰国

2005年 第59回コー IC 世界大会・レポート

本年のスイス・コーでのIC世界大会は、7月7日から8月19日まで、『理想と実践のへだたりを縮める』の総合テーマの下、次の5つの会議が開催されました。その内、「人間の安全保障を前進させるための良き統治」の会議についてご報告します。

- 7月7日～13日 「奉仕の精神、責任感、リーダーシップ — 社会的な、そして世代間のギャップに橋を架ける価値」
- 7月16日～24日 「ヨーロッパのための心と魂」
- 7月27日～8月3日 ファミリー会議「国際コミュニティでの共生の体験」
- 8月5日～11日 「人間の安全保障を前進させるための良き統治」
- 8月13日～19日 「危機に瀕する世界 — 平和をもたらすためのすべを学びあう」

「人間の安全保障を前進させるための良き統治」

長野 清志（国際IC日本協会事務局）

多彩なゲストスピーカー

この会議には世界各国から250名が参加しました。開会式では、かつてICの仕事に従事し、現在は国連のアフリカ第2課の人道援助の責任者を務めるアーナ・エズィアコンワさんからの基調講演がありました。彼女は、個々人の安全と世界のコミュニティ全体の相互関係を強調しました。「個人の安全が脅かされる時、それは国際的な安全も脅かされることを意味します。…先進国と発展途上国の物質的な富のギャップと共に、人の心の貧しさが存在します。世界の経済的な安全保障を欲するならば、同時に私の国、カナダにおいても、精神的、感情的な安全を強めることに努めなくてはならないと気付きました」と述べ、ICの友人たちの友情やICで受けた訓練が現在の仕事を行う上で如何に役立っているかを述べました。

「欲望からの自由」のテーマで行われた全体会議では、ジュネーブ安全政策センターの役員であるラマ・マニ博士は、「私たちの欲求は必要から、それとも貪欲さから生ずるものでしょうか？ 私たちの選択が他の人たちの貪欲さを助長していることになってはいないでしょうか？…貪欲さが人が実際に必要とするものよりはるかに大きくなってしまっています。貪欲さが賞賛され、健全なもののように見せ掛けられ、合法化され、必要なもののようにみなされています」と述べ、必要性和貪欲さというものについて改めて考えさせてくれました。

「恐れからの自由」のテーマで行われた全体会議では、元WHO（世界保健機構）のエグゼクティブ・ダイレクターを務めていたエジプト人のハマッド博士が、「今日

のテロは、イスラム、あるいは、他の宗教に根ざすというのではなく、人々が受けた辱めや収奪や悲惨さに起因する絶望に根ざしているのです。個々人の尊厳を回復することがテロに対する戦いの効果的な方法の一つです」と述べました。また、スイスの外務大臣による、「より安全な世界をもたらすためのスイスの貢献」というテーマでの講演もありました。

少数民族の参加

今回もオーストラリアのアボリジニ、カナダのファーストネーション（インディアン）、スウェーデンのサミー、インドのナガランドの代表等による、少数民族の人々の対話も同時並行的に行われていました。先住民族の人たちの自然と共生した生き方等は環境破壊の進む現在、特に先進国に住む人々が学ぶべき点が多いと改めて感じさせられました。オーストラリアのアボリジニの人は、歌手として会議中も自作の歌をしばしば披露してくれましたが、それは、自分が受けた数々の偏見を乗り越え、融和を築くため共に歩んでゆこうという力強いメッ



●融和のメッセージを歌で伝えたアボリジニの歌手

セージソングでした。特に、歌と共に、自分のこれまでの人生を語ってくれた中で、ある日、ガソリンスタンドで店員が間違えて余分によこしたオイルをそのままもらわず、心のささやきに従い返したのが自分の人生のターニングポイントになったという話しは感動的でした。

原爆記念日に

私は、会議の始まる8月5日にコーに到着したのですが、直ぐに会議のオーガナイザーの一人であるスイス人から「広島に原爆が投下された8月6日である、明日の午前のセッションでスイスのシュベリーさんと共に話をして欲しい」と頼まれました。翌朝、スイスのシュベリーさんが、先ず、1950年にMRA (ICの前身)の招待を受け、日本の各界の代表からなる代表団70名がコーを訪れた時、自分もお迎えをしたということ、そのメンバーの一人であった、当時の浜井広島市長が、焼け残った楠の木から十字架を作って持って来られコーに贈呈されたこと、そして、この訪欧の後、広島原爆記念碑に「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返させぬから」ではなく、「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」と刻む決定をされたこと、更には、「ご自身も被爆をされながら、その恨みを述べることなく、人類のために決してこのような悲劇を繰り返してはならない」と訴えられたことに感銘したと話されました。そのお話を受けて、私の方からは、その代表団のメンバーであった相馬雪香国際IC日本協会名誉会長が、その後、一貫して平和作りのために活動されてきたこと、特に日本の難民救援活動のパイオニアとしても活躍されてきたこと、また、その志を継ぐために、日本のIC協会としても、歴史の傷の残る日中韓の間で青年交流をしていることなどを話すことができました。

世界の人々と話し合える場所

今回も改めて感じたことですが、コーでは本当に色々な国々の人々と出会えます。コーでは会議に出席するだけでなく、皆で交替で料理を作ったり、お皿洗いをしたりと会議場の運営にも参加します。私は、クッキングチームに入りましたが、この同じチームをコミュニティと呼び、お互いを知り合うための話し合いの時間を持ちます。今回の私の属したコミュニティには、スイス、フランス、イギリス、ロシア、カナダ、パレスチナ、オーストラリアの人たちがいました。会議で話されたことで感じたこと、また、自分や自分の国での問題等について率直に話し合うことによって、お互いの距離がずっと縮まります。また、3回の食事と午後のお茶の時間も、お互いを知り

合うための良いチャンスになります。私のある日の食事は、朝食をスイス、ベトナムの人と、昼食はドイツ、カザフスタン、ウクライナの人と、そして、夕食はオーストラリアの人と食べ、翌日は、朝食をロシアの人と、昼食はガーナ人と、そして、夕食をタンザニアとカナダの人ととるといった具合です。前から知っている人たちはもちろん、毎回、新しい出会いも沢山あります。そのような食事の席で、新しく出会ったインドの若いビジネスマンの話は心に残りました。彼は、家族で事務機器の販売代理店をやっています。インドではビジネスを円滑に進めるために、汚職が盛んに行われます。彼も、競争に負けないう、他の業者同様汚職をしていたそうです。しかし、ICに出逢い、正直にやっていた方法がないか考え始めたそうです。ある日、お父さんと相談して汚職を止め、その同じ金額を顧客の値引きに当てるように変えたそうです。最初は大変な時期もあったそうですが、今では、顧客の絶大な信用を得てビジネスが極めて順調に行くようになったとのこと。まさにICの考え方が実際的であることを示してくれる好例と感じた次第です。



●世界平和と参加者の帰国の無事を祈るカナダのファーストネーション(インディアン)の代表

アジア人同士での交流

コーは、このように世界の様々な人々と親しく話せる場所ではあるのですが、やはり言葉や文化の壁は存在します。今回も、アジアからの参加者は少なく、自然と一緒にお茶を飲んだりしながら親しくなりました。日本から即席ラーメンを持って行って、韓国や中国やパレスチナの人たちとヌードルパーティをしたり、ハイキングに行ったりしましたが、韓国の青年からは、「英語が充分でないので、滞在が少し難しかったが、あなたと知り合えて良かった」と言ってもらいました。また、上海からの大学生は、私が発つ前の晩に部屋を訪ねてくれ、「これは、娘さんへのお土産です。あなたが私の初めての日本人の友人です」と言ってくれました。これらの出来事は今回の私のコーの滞在中のハイライトとして心に残るものとなりました。

2001年9月11日のアメリカでのテロは19名のイスラム原理主義者によって引き起こされ、世界を恐怖に陥れました。しかし、イスラムの本当の教えと姿を理解する一助としてイギリスのICの方々が、IC(MRA)と出会ったイスラム教徒19名の方々の体験や考え方を紹介した『何故テロか—他に選択肢はないのだろうか? /Why TERROR—is there no alternative?』という小冊子を作りました。日本人に馴染みの浅いイスラム教への理解を深めて頂ければと、この小冊子を翻訳して順次ご紹介しています。第4回は、アフリカ系移民2世等の暴動で揺れているフランスで生活した体験を持つ、チュニジア人のイスラム教徒の方のストーリーです。

◇ ICと私 ◇

人種差別主義を超えて

ハテム・アカリ

(チュニジア/フランス、大学講師)



1960年代の終わりに、小学校の教師をしていた父は、政府と根本的に相容れないという人々がするように、主に政治的な理由でフランスへ移住することになりました。私たちは「アラブ系北アフリカ移民」という新しい社会的地位を得た訳ですが、それは、常に否定的な意味を含んだ呼称でした。最も悪意に満ちた反応と出会ったのは多分学校でですが、特にどのコースを私たちがとれるのかアドバイスをした女性によるものでした。

あなたたちは夢見る人よ

私は科学方面のコースに進みたかったのですが、彼女は、「あなたたちアラブ人は『千一夜物語』を書いた人たちでしょ。あなたたちは夢を見てるのよ。フランスに来て医者やエンジニアになって、お金持ちになって車で家に帰ろうと思ってるんでしょ。だめよ、おちびちゃん。何か技術を学んで二年後に労働者になるのよ」。

それでは、フランスに来た意味が失われます。残る方法は私立の学校で学ぶことでしたが、父は労働者でその稼ぎはわずかなものでした。父には私と兄弟両方を私立学校に入れることは出来ず、どちらかを選ばざるを得ず、私を選んだのです。これは自分にとってもとてもつらい経験でした。

自分自身の過ちの正当化

そういうわけで、私はカトリックの私立学校に入りました。この人種差別の経験はとても辛く、そうしたことを行った人たちに対して深い憎しみの気持ちを持ちました。私には、いや多分誰にとっても、この感情を普遍化しないことは非常に困難だったと思います。つまり、ア

ラブ社会とイスラム教徒を批判する人は全て悪意を持った人種差別主義者だと見なすようになったのです。例えその人が正しい指摘をしたときでさえ。自分自身の過ちを正当化するために、人種差別主義者をその言い訳に利用するようにもなりました。例えば、もし私が会議に遅れても、「予期しない困難にぶつかることは普通のことで誰にでもおこりえる」と、批判を受け入れませんでした。このことに関するコメントは全て自分への侮辱ととらえました。時間厳守の本当の意味を理解したのはずっと後のことです。

人生を決定付けた24時間

1973年7月、父は休暇を利用して、リュックサックとお金を少し持ってスイスに何日間か行くように勧めました。偶然か天佑か、あるいは心の声が、私をICの国際会議場のあるコーと呼ばれる素晴らしい場所へと導いてくれました。そこで24時間という短い時間を過ごしたのですが、それは私の残りの人生を決定付けることになりました。多くのことに興味が湧き、好奇心が引き付けられ、そして驚かされました。これは夢なのか、それとも現実なのか？

何と、それは夢ではなく現実でした。パリで知っていたのとはまったく違う種類のフランス人たちと出会ったのです。彼らは、フランスに人種差別があることを認めていました。彼らは私に許しを乞い、この社会悪と戦い、互いの良い国民性に重きを置きながら、より良くお互いを理解するために共に働こうと誘ってくれました。

それ以来、彼らと共に働くことを学んできました。そ

れは決して簡単なことではなく、お互いに怒ってしまうこともありましたが、互いに率直であろうと決め、リスクがあろうと、本当のことを言うようにしました。その時、自分が二つの文明に身を置いていることの利点に気づきました。つまり、文化的にはアラブ人であり、宗教的にはイスラム教徒ですが、幼少の頃から西欧に住んでいます。そのために、二つの文明を近づけられるよう貢献できるのではないかと感じたのです。

チュニジアへの帰国

フランスに15年滞在した後、私は母国へと帰ることにしました。もし橋を架けたいというのであれば、両サイドで働く必要があるからです。地中海側については十分に学んだので、両国の関係を強化する手助けをするために、今度はもう一つのサイドに私が学んだことを伝えたいと思ったのです。私は車もお金も持たず、しかし、多くの本と経験に満ちあふれたところをもって母国へと帰りました。

チュニジアに帰って、学生たちが持つ西欧への考えにショックを受けました。多くの学生たちは見識が狭く、西欧を、物質主義と墮落した道徳観という独裁者に支配された世界とみなしていたのです。私たちは西欧を多くのことで非難しますが、決して私たちの方が優れているという訳ではありません。最悪な側面をまねてしまうことも多いのです。しかし、学生との話し合いを重ねるうちに、その多くが西欧には他の側面もあるということを理解してくれました。

もしこれらの考えと出会うことがなかったなら、大きな憎しみの心をもって国へ帰っていたことでしょう。私が西欧で学んだことを、多くの他の人々は経験していません。そして、多くの人々が彼らを受け入れた国への憎しみと復讐心をもって国に帰って行きました。

キリスト教徒との出逢い

二つ目の経験は、キリスト教徒との出会いについてです。チュニジアを発つ前、父は、私たちがフランスの制度にうまく適応出来るようにと、前もって非常にしつけが厳しい地元のカトリックの学校へ入れました。小さな違反を犯しても、ズボンや靴を脱がされ叩かれました。おしりに傷は残りませんでした。心に傷が残りました。私はそのローブを着た男をひどく憎み、キリスト教圏の国々は、あのような男たちばかりなんだとフランスへ行くことをひどく恐れしました。フランスに行ってみて、そのことがキリスト教徒であることとは全く別物であると気づきましたが、私立の学校へ行く時はやはり恐怖にかられました。

人間性は皆同じ

有難かったことに、先生達は私を温かく迎え入れてくれましたし、私の国について話してくれた先生もいました。彼らは私の信仰にさえ興味を持ってくれ、答えが分からないような質問までよくしたので、私自身も自分の宗教にもっと関心を抱くようになれました。何より他の宗教に対して心を開いて接すること、そしてそれを内側から理解するということを学びました。1970年代の終わり頃から、私は多宗教間の対話の会議に出席し始めました。今日、私たちは、今まで以上にお互いを知り合う必要があります。何故なら世界の将来はまさにそのことにかかっているからです。神が正しい道に導いて下さらなかつたら、私の人生での様々な体験は否定的な結末をもたらすように作用したことでしょう。人間性とは、イスラム教徒であろうと、キリスト教徒であろうと、ユダヤ教徒であろうと、あるいは別の伝統に属する人々であろうと、洋の東西を問わず変わらぬものであると確信しています。

【ご参考】ヨーロッパのイスラム系移民

西欧の戦後の経済の復興に伴う、経済成長で労働力が、南欧からの移民だけでは足らなくなり、旧植民地など歴史的なつながりがある地域から移民を大量に受け入れるようになる。現在の欧州主要国のイスラム人口は次の通り。(ウェブサイト「ユーロ・イスラム」より)

| | |
|------|--|
| フランス | 400～500万人 (アルジェリア、モロッコ、チュニジア系が300万人、総人口約6,200万人) |
| イギリス | 140～180万人 (パキスタンなどインド亜大陸から多数、総人口約5,880万人) |
| ドイツ | 350万人 (7割がトルコ系、総人口約8,200万人) |
| オランダ | 70万人 (トルコ、モロッコなど、総人口約1,530万人) |
| スペイン | 50万人 (モロッコ系が多い、総人口約4,200万人) |

— 会員の活動紹介 —

会員の方々がそれぞれどのような活動をされているのかをご紹介します。皆様からのご投稿も歓迎致しますので是非お寄せ下さい。

遠慮しないで行動を

佐々木 淳 (会社員)

昨今、若者の間で、“ニート (NEET)”の増加が社会問題となっている。ニートばかりが取り沙汰されているが、現代の若者は、わずか数年で転職をする者が非常に多い。少なくとも私の周囲には非常に多く、ご多聞にもれず、私もこの夏、転職を経験した。

旅行会社に2年半勤めた。学生の際は、新聞記事を書いてみたり、日韓の学生交流をやってみたりと、色々活動していた。だが、入社後の2年半は、それらのことは何もしていなかったし、またしたくなかった。日々の仕事をこなすだけで自分が目一杯で、ほかの事を考える余裕がなかったのだと思う。そんな中、転職に向けて少し動き始めた6月、久しぶりにIC小田原国際会議に参加した。その際、相馬さんがおっしゃられた言葉に大変心を動かされた。

“私はもう遠慮はしない。正しいと思ったら遠慮しないで行動することにした。”

その日から、自分のテーマも“遠慮しない”になった。元来考えるより体が先に動くたちの自分にとって、これは特段難しいテーマでもなく、その後、幸いなことに、自分の希望する職に転職することができた。こうして夏に自分の自由に使える時間が増え、更に“遠慮しない”を実行する時間が与えられた。今回のインドネシア行きは、何と言ってもこの小田原会議での決心が大元である。

さて、この束の間の時間をどう使うか。転職先は外資系企業であることもあり、英語を勉強しようと思った。その頃、たまたま一緒に食事をした太田敦之さんにこの話をしたところ、インドネシアでのユースキャンプを紹介された。キャンプは英語で行われるとのこと。即決だった。就職してからというもの、全くというほど英語は使っていなかったし、実践の場も持たなかった。キャンプの趣旨や内容を知る前に“遠慮せず”決めてしまった。最初はこんな多少不純かも知れない動機で決めたことであったが、むしろ単に英語を勉強するよりも、他国の若者と英語をツールとして様々な考えを共有することの方が、英語のためのみならず、自分自身のためにも、とてもよいことであると思った。

このキャンプの趣旨は、主に、1.インドネシアの若者にICの理念を広めること、2.来年開かれるアジア・大平

洋青年会議 (APYC) のオーガナイザーをリクルートすること、3.APYCとアクション・フォー・ライフ (AFL) の内容に関し、各自の意見をシェアすることの3つであった。キャンプの内容は、静かな時間とは何か、自分の中の一番大切なこと、人、ものは何か、そしてそれを人とシェアするとはどういうことなのか、といったことを説明していく。更に早速それを実践する。参加者は外国人がオーストラリア、韓国、カンボジア、そして日本から1名ずつ、そしてインドネシア人の若者が30名ほど。キャンプの開会にあたり、目にした光景に感動した。インドネシアは多民族、他宗教の国。今回も色々な宗教の人が集まっていたのだが、そのすべての宗教の代表者が、それぞれの神様に祈りをささげるのである。イスラム教、キリスト教、仏教、儒教。学生の頃、日韓の交流プログラムに関わっていたが、この国では、共存とか、相互理解とか、お互いの尊重というもの自然と日常的に行っていると感じた。また、感動的だったのが、イスラムのお祈りを体験させてもらったこと。“やってみたいんだけど…”と言うと、喜んでモスクに招き入れてくれて、体の清め方に始まり、一連の祈りを教えてくれた。一部の過激派のせいで、イスラム教というと怖い宗教のイメージがあるが、実際にはとてもフレンドリーで、こころ落ち着く宗教だった。間違ったイメージであることは分かっていたが、やはり百聞は一見にしかず、である。

もう一つ驚いたのは、このキャンプは全て通訳なしの英語で進められたこと。本当に気持ちのニュアンスの部分で必要な場合のみ、インドネシア語に訳された。



●キャンプの参加者と共に (後列中央が佐々木さん)

全体を通して3、4回であろうか。自分に置き換えてみて、日本人が外国人を迎えて会議をやっても、共通言語を持たない日韓の交流をやっても、英語でスムーズに進行したことはあまりなかった。英語で滞りなく会が進んでいくことに、大変驚いた。今回インドネシアに行くきっかけは、本当に偶然の重なりであった。でも、遠慮しなかったことで、またとてもいい経験を自分の中に増やすことができた。海外に自分のことをよく知ってくれている友人も増えた。今回学んだことで一番大きかったことは、遠慮しちゃいけない、ということだ。どこかで何かを遠慮していたら、こんないい経験はできなかったと思う。今回この考え方を気付かせてくれた方々、またチャンスを与えてくれた方々、インドネシアで暖かく迎えてくれた方々、全ての方々に感謝申し上げたい。



●相互理解を深めた参加者たち

国への愛と誇り

高橋 久子 (主婦、地域ボランティア)

IC小田原国際会議のあと、たまたまお宿がないという韓国の学生を預かることになった。我が家は6人家族であったが、子供達が一人、二人と独立していき3番目の長女が今年4月に結婚すると、末の息子との3人暮らしとなってしまった。ハンさんは高校生の時2年間日本語を勉強しているので、片言でも意思疎通に不自由はなかった。驚いたのはひらがな、漢字をよく知っていて読み書きが一通りできることであった。

ハンさんが我が家に泊まることになった時、主人は「ふーん」という反応であったが、彼が家に着くとすぐに主人の方が夢中になっていろいろと言葉の意味を説明したり、テレビを見ながら日本の政治のこと、文化のこと、言葉の言い回しなどなど、熱心に教えたり、議論したり、毎日食卓でも楽しい会話が续くようになり2ヶ月は瞬く間に過ぎて行った。いままで、3人3様に違う方向へ向いていた家族がハンさんのお陰で一気に会話が增えた様に思う。ハンさんは、積極的に東京のあちこちを一人で見て回り、日本の学生とメール交換をしながらいろいろな日本の日常を経験していった。

彼は日本に対してある種の若者らしいあこがれを持って貪欲にいろいろ勉強したいと思って来日したようだが、物が豊かな東京だが、物価は高くそれほど生活は豊かな訳ではないと悟ったようだ。東京では家一軒持つのに一生働きつづけなければならないと知ってびっくりしていた。韓国なら仕事について10年もすれば程よい

軒の家を構え家族を養う事ができるそうだ。また、韓国では車は韓国製のものしか買わないと言っていた。2年間の徴兵のことも苦しいけど自分の国のために働くのは当然と言う。彼の国を愛し、国に誇りを持つ姿には家族皆が感動した。さらに、ほかの国の事も一生懸命勉強しようとする姿に、同じ年頃の息子も驚いていた。生まれて初めての経験という地震も2度体験、念願の富士山にも日帰りで登頂、沢山の思い出を抱えて、また初めて経験する台風の吹き荒れる日に帰って行った。最初は部屋が空いているので面倒を見てあげようと思った私だったが、家族全員がハンさんに何か失っていたものを教えられたような気がする。国に対する誇りと愛を・・・

ハンさんありがとう。またいつでも帰って来てください。待っています。



●日韓の学生交流会で (後列右端がハンさん)

▼▼CRT日本委員会ニュース▲▲

第20回 CRT グローバルダイアログに参加して

奥田 有紀

CRT 日本委員会インターン

第20回グローバルダイアログが2005年10月20日から22日まで、ポーランドの首都ワルシャワで開催されました。レフ・カチンスキ (Lech Kaczynsk、ワルシャワ市長、現ポーランド大統領) 氏に加え、共産主義に終止符を打つために尽力されたレフ・ワレサ (Lech Walesa 元ポーランド大統領、1983年ノーベル平和賞受賞) 氏の全面的な支援を得て Royal Castle 宮殿を会場として、内容の濃いダイアログが行なわれました。

レフ・ワレサ氏は経済人コー円卓会議の「企業の行動指針」を共産主義が崩壊した後、自由市場民主主義を推進するにあたっての新しい基準として採用する意向を示しています。約150名の参加者が、日本、米国、ロシア、ポーランド、オランダ、ドイツ、マレーシア、オーストラリア、タイ、メキシコなどから参加し、「責任ある資本主義~Let's Make it Work~」というテーマで様々な意見交換が行なわれました。今年のダイアログがポーランドという社会主義から資本主義に移行しつつある国において行なわれたことは、資本主義の抱える問題を考える上で有意義でした。企業は経済活動を行なう際の基本的な価値感を改めて問い直し、不正の温床の拡大に歯止めをかけなければいけないのだという問題意識が、ダイアログ全体に流れていました。そのような議論の中で、日本からは NEC の中村暢彦氏、CRT アドバイザー前田浩氏、佐久間健氏、石田事務局長から CSR 取り組み事例や日本での“CSR イノベーション”の実績の報告があり、抽象的になりがちな CSR の議論に具体的な施策

を提案して、海外の参加者からも大変高い評価を得ていました。その後、“CSR イノベーション”の導入に向けた問い合わせがロシア、ポーランド、ドイツ、フランス、オランダ、マレーシア、タイ、メキシコ、米国などから相次いでいます。また今回のグローバルダイアログでは CRT の設立者である、フリッツ・フィリップス氏とオリビエ・ジスカールデスタン氏に CRT 創設20周年を記念して CRT アワードが授与されました。1986年発足した CRT が当時から提示している理念、1994年に策定されたコーの基本原則が、現在も色褪せていない、むしろ、持続的な社会の発展を考える上でますます重要視されているのだということを認識できました。今回新会長に就任したブレナン卿が最後に、世界を見渡して西の標準が世界の標準ではないことを認識する必要がある、CSR は各国の多様性を考慮に入れ、各国の文化を尊重した形で導入されるべきであると言及され、今回ポーランドでグローバルダイアログが開催された意義を再確認いたしました。

来年のグローバルダイアログは7月、スイスのコーで開催される予定です。

【日本からの参加者】(敬称略)

- 金子 尚志ご夫妻 (NEC 名誉顧問)
- 橋本 徹 (ドイツ証券会社東京支店会長)
- 中村 暢彦 (NEC 企業行動推進部統括マネージャー)
- 船橋 晴雄 (シリウス・インスティテュート代表取締役)
- 金子 保久 (松下電器産業客員)
- 沖野 清昭 (横河電機執行役員経営監査本部長)
- 神戸 好夫 (大日本印刷 CSR 推進室長)
- 前田 浩 (EQML 代表取締役社長)
- 佐久間 健 (コミュニケーション戦略研究所代表取締役)
- 平野加奈江 (同時通訳者)
- 美馬伯美子 (同時通訳者)
- 石田 寛 (CRT 日本委員会事務局長)
- 奥田 有紀 (CRT 日本委員会インターン)



●会議の様子

◆◆◆ IC ニュース ◆◆◆

■よつ葉会主催のバイオリン・コンサート

去る11月18日(金)にICよつ葉会(女性の会)主催による、斎藤アンジュ玉藻さんのバイオリン・コンサート『いつも誰かのために音楽を』が、東京の代々木上原の「ムジカーザ」を会場に開催されました。世界にはばたく若い演奏家に演奏の場を提供したいとのICよつ葉会のメンバーの熱意に応えるように、会場は130余名の熱気が溢れました。この10月に日本音楽財団より貸与された、1700年製の名器ストラディヴァリウスをもつ

ての、アンジュ玉藻さんのバッハやモーツァルトの演奏は素晴らしく聴衆を魅了しました。アンジュ玉藻さんは、去る6月のIC小田原会議でも素晴らしい演奏を披露してくれましたが、先頃ボン・フィルハーモニーのソリストに抜てきされ、この12月よりは、ドイツ縦断ツアーに参加されるそうです。ますますのご活躍をお祈りすると共に、この度のコンサートの開催にご協力下さった皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

■第43回通常総会及び講演会

去る12月3日(土)に、第43回通常総会が、日本カメラ財団の会議室にて開催されました。平成18年の事業計画並びに予算案が承認されたと共に、新理事として、今号にも記事を寄せて頂いている高橋久子さんが選任されました。

また、総会に引き続き『先ずできることから一日本を変えるために』のテーマで講演会が行われました。「IMA緊急シェルター」を立ち上げ「野宿者」を初めとした人々の支援に取り組むアメリカ人のレイナ・ルイセンコさ

ん、そして、日本初の民間自警団『明大前ピースメーカーズ』を結成し活動されるなど幅広く平和活動に取り組まれている吉川英治さんというお二人から情熱を込めたお話しを伺いました。お二人の今後のご活躍のサポートと共に、お二人のイニシアティブを参考に、私たち一人ひとりに課せられた使命の発見、確認に努め、少しでも明るい社会の実現に貢献していければと思います。

入会のご案内

IC (Initiatives of Change イニシアティブス・オブ・チェンジ、前身はMRA (Moral Re-Armament))は、1938年に ロンドンで発足して以来、対立する相手や国を変えたいと思うなら、先ず自分、そして、自国から変わるべきである」と言う理念に基づき、あらゆる民族や宗教や文化の根底に流れる共通の倫理観(モラル)を普遍的な絶対基準(正直、純潔、無私、愛)にまとめ、それを基盤にして紛争解決に不可欠な信頼関係醸成のための橋渡しを、世界各国で進めてきました。

当国際IC日本協会は、1977年より毎年世界各国の代表を招いて国際会議を開催し、相互理解と信頼関係の醸成に努めてきた他、講演会や各種会合、各国のIC国際会議への参加、新しい東アジアの関係構築を図るための青年同士の交流等々内外で様々な事業を行っています。ご入会された方には各種行事案内、又、機関紙等をお送り致します。世界情勢を知り国際的な視野を得ることができます。

| | | | | | | |
|-----|--------|----|---------|---------|----|-----------|
| 年会費 | 1. 正会員 | 個人 | 6,000円 | 2. 賛助会員 | 個人 | 3,000円以上 |
| | | 法人 | 50,000円 | | 法人 | 50,000円以上 |

編集後記

最近、フランスでの移民2世・3世による人種暴動が大きく報道されました。今号の記事にもあるチュニジアの方の体験からも相互理解の必要性がますます高まっていることが理解されます。日本でも少子化による人口減少の問題の解消のために外国人の受け入れを近い将来増やしていくべきとの議論が始まっています。異なった文化を持つ人々と共生していくために、私たち一人ひとりがどのような心構えをもっていけば良いのか、皆様と一緒に考えていきたいと思えます。

どうぞ、お元気でよいお年をお迎え下さいますようお願いしております。